

# あの日の 決断

岩手の経営者たち

**盛** 岡市上堂の組み込み機器開発・製造のイーアールアイが、新しい看板商品として構想するのが、小型の無線電波送受信機「インクロス」だ。

近距離無線通信技術（ブルートゥース）を用い、衛星利用測位システム（GPS）が使えない工場や倉庫内でインクロスと小型発信端末（ビーコン）を連動させ、人、モノのおよその位置を特定。人の動線や作業を可視化できるシステムを作り、生産性向上が課題の企業などに売り込むことを計画している。

屋内位置測位の技術開発は長年、県内の大学と共に研究してきた。社長の水野節郎さん（64）は「既に7、8社と実証実験に入っており、2020年度中にも量産をスタートしたい。（ビーコンの）ブルータスとセットで売りたい。他社ブランド（OEM）で欲しいという会社もあるかもしれない」と期待を高める。

60歳を過ぎ、事業承継の計画書を



「令和10年ビジョン」の検討メンバーと肩を組む水野節郎さん（中央）。より良い企業を目指し、社員に「自ら考えること」を求める＝盛岡市上堂・イーアールアイ

## 自走する社員求める

### 憂いなく継承へ

イーアールアイ

▽◎△

### 水野節郎さん

まとめた。「70歳までに新しい社長に渡す」と語り、18年9月、クラウド会計の開発ベンチャーに勤めていた長男の剛さん（37）を後継者候補として入社させた。

「銀行との付き合いを考えると次は息子しかない。化学メーカーで開発を担当した経験があり、製造工場のことには分かっている。やれるかどうかでなく、やらせると決めて渡すしかない」。既に無線モジュール販売の子会社を任せ、年内にはイーアールアイの取締役に就ける考えだ。

将来への準備は昨秋、一般社員レベルでもスタートさせた。30代を中心に10人ほどの組織を立ち上げ、創業25周年に当たる28年度の会社像「令和10年ビジョン」の検討ミッションを与えた。

「次を担う人たちに10年後、世の中に何を提供するか、会社がどうありたいかを考えてほしい」

根底に「自走する社員」への願いがある。「顧客が考えていないことを提案できれば、仕事の付加価値が上がる。そのためには常に考える力を付けたいといけない。社員一人一人が考えて走れるようになれば、もっと生き生きと働ける、いい会社になれる」

高度情報化社会は得意とする無線やセンサー制御の技術を求めている。ビジネスチャンスは広がる。

それでも、こう言い切る。「会社の究極の目標は岩手で新しい仕事と雇用を継続すること。しっかりと賞与を出せる収益を上げて、社員と家族が幸せになれる企業であればいい。規模を追う必要はない」

自身の役割は「次世代への確かな移管」。売り上げの多くを受託開発に頼るビジネスモデルは、功罪が半ばする。技術と営業の総合力がますます問われる。憂いのない継承へ、当分は全力が続く。

（水野節郎さんの回は終わり。次回は4月に掲載予定）